

研修医・指導医リレーエッセー⑤



初期研修の1年間を振り返って

岡山市立市民病院 初期研修医 高橋 拓真

岡山市立市民病院研修医2年目の広島県出身、高橋拓真です。このたびエッセー執筆の機会をいただき、誠にありがとうございます。これまでの研修生活を振り返り、率直な思いを綴らせていただこうと思います。

私は、岡山大学を卒業後、志望科の脳神経外科での強みに魅力を感じ、岡山市立市民病院に入職しました。この1年間の研修を経て最も実感しているのは、病院全体の雰囲気の良さです。上級医の先生方は皆優しく、不安だらけの新社会人生活でしたが、おかげさまでなんとか乗り越えることができました。またプライベートでも仲の良い同期たちにも恵まれ、とても充実した研修生活を送ることができています。

4月に脳神経外科を回った際にまず感じたことは、人の生死に深く関わる医師という職業の尊さです。正解が一つとされていた「医学」と違い、「医療」には絶対的な正解はありません。特に終末期の場面では、延命治療の有無などに関して、医学的な見地と本人・家族の価値観に立った見地の両面から妥当な結論を出すことが求められると知りました。本人や家族の意思を尊重するのは当然のことながら、時に医師が、言葉をもって最善の選択に導く必要があるということも学びました。また、予後が非常に厳しい場合には、「看取り」という選択肢を医師が提示することで、家族が苦しい決断をする際の罪悪感を和らげる助けになることもあると知りました。治療により劇的に予後が変わった症例や、看取りの場面に遭遇するたびに、医師の仕事の尊さと責務の重さを実感します。

研修医として一番成長を実感できるのは、やはり主体的に診療に関わったときです。特に呼吸器内科のローテ中は、ICUで管理中の患者の人工呼吸器設定、免疫抑制薬や抗菌薬のオーダー、栄養・血糖コントロールなどの全身管理を、上級医と相談しつつ、最終的には自分で判断して方針決定させていただきました。日々無数の疑問が湧き、調べれば調べるほど自分の無知を痛感しましたが、予後を少しでも改善できるかもしれないという思いが勉強のモチベーションになりました。また、指導医の先生からいただいた「お風呂の中でも患者さんのことを考えるようになれば一人前」という言葉は印象的でした。目の前の患者を助けたいという気持ちを大切に、学び続ける姿勢を保ち続けること、経験した症例や研究成果を社会に発信し、医学の発展に貢献することが、良い臨床医の条件なのではないかと思っています。

当院では研修医の指導に熱心な先生が多く、良い症例に出会えれば学会発表の機会を積極的にいただけます。学会発表がとても上手な同期もいて、良い刺激を受けています。現在、産婦人科ローテ中に経験した症例について、英語論文の執筆の機会をいただいております。学生時代から医学英語に興味があり、書くなら英語で書いてみたいという私の希望を尊重し、快くご指導くださっている産婦人科の先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。

年度が替わり、新一年目が入職し、社会人として初めての後輩ができました。このエッセーを

綴りながら、研修当初の自分が経験した不安や戸惑いを思い出すことができました。優しく、頼り甲斐のある2年目の先輩になりたいと思うとともに、自分の理想の医師像に近づけるように、日々努力を惜しまず邁進していきたいです。



研修医2年目男子メンバー。奥左端が筆者

✧——… 岡山市民病院 …——✧

下写真は、4月3日に開催された岡山県医師会主催の令和7年度「WELCOME研修医の会」に参加された岡山市民病院の研修医と今城健二院長（左端）、研修責任者の狩山和也副院長（右端）。



※令和7年度「WELCOME研修医の会」の当日写真については、

- <https://www.okayama.med.or.jp/doctors/welcome.html>
- または、



訂正 「研修医・指導医リレーエッセー」④の集合写真の説明で、「岡山市中区沖本」とあるのは、「岡山市中区沖元」でした。